

進化する「まちづくり」

柿崎祐一

ゆくという、ちょっと変わったゼミだった。SKOPは金沢区の職員自主研修をきっかけに結成され、ワークショップやまち歩きイベント、シンポジウム、そして金沢の水がテーマのイベント「金沢の水の日」など、歴史や文化が多く残る金沢の街にこだわった活動を行っているまちづくりグループである。

このSKOPで普通の学生生活ではちょっと味わえない貴重な体験をいろいろとさせてもらった。たとえば平成八年三月に行った、「地図」を媒体にまちづくりを考えるイベント「横浜金沢地図博覧会」では、企画スタッフとして企画段階から参加し、さらに広報・記録担当ということで市庁舎へ報道資料を持っていったり市のホームページにPRを載せるといったことまで任せられたりもした。

大学に進学する頃、漠然とだが就職について考えてみたことがある。そのとき、意識し始めたのが「公務員」という業種だった。そしてこの春横浜市に入庁したが、ここでそれまでの市役所、特に金沢区との関わりについて、自身の「再確認」の意味も含め、触れてみたい。

これら市民と行政、そして大学が一体となった活動が弾みとなったのか、平成九年度には金沢区はパートナーシップモデル事業総合モデル区に指定された。このモデル事業の一環として制作されたのが、インターネット金沢区ホームページ「武州金澤

「電脳八景」である。私はここでホームページの制作を任せられることになったが、今までホームページなど作ったことがなく市販されている手引書を相手に格闘する日々がしばらく続いた。なお、今でもこのホームページはゼミの学生が制作を担当し、週一回の情報更新を続けている。

このようにSKOPという活動を通して一番強く感じたのが「まちづくり」の変化の早さである。私がこの活動に参加した頃は市民参加のまちづくり活動がそれほど盛り上がりつつあったのが、今ではいたるところでまちづくりが叫ばれ、また市民との「パートナーシップ」という概念が重要なポイントを占めるまでになってきている、といった具合にある。

入庁して最初の職場は、経済局食肉市場という、今まで知る機会がなかったところで、まだまだ「新しいこと」ばかり、戸惑いの連続である。しかし、学生時代の経験を少しでも仕事に生かし、また今までは違った角度でまちづくりに関わっていたら、と思う。

あとがき

「市町村は実践する行政組織である」これは、今号市長インタビューの中で語られている言葉です。発言はさらに「市民と接する現場から見出される無数の研究テーマの存在」「最良の方策のためのフレーム変更の可能性」へと展開しています。

横浜市という大組織において、

事業目的を達成するためにこなさなければならぬ事務は膨大な量となり、課題に関する本質的な検討の余裕を与えないほどです。

しかし、多様な価値観の中で市民生活が開発される現在、日々の業務の中から抽出された課題を広い視野でとらえ業務改善や施策に発展させていくことは重要であり、横断的な検討・研究・調整がますます必要とされていくのではないのでしょうか。

また、理論やデータだけではなく、肌で感じる市民ニーズをも視野に入れた実践的な行政

施策の研究は、住民と直接対応できることを最大の利点とする基礎的自治体職員だからこそ味わえる醍醐味と言えるでしょう。今回はそうした検討・研究の一つの形態として、職員のみならずが自主的に行っている業務や政策に関する研究の成果を特集として取り上げました。

「実践から生まれ出る研究」「実践に活用可能な研究」を心がけ、変化し続ける市民生活から現在進行形の課題を的確に抽出する能力を開発する努力をしていきたいものです。

△重内▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にまとめて企画局政策部調査課までお送りください。

FAX 六六三一四六一三
お問い合わせは、電話六七一一〇二九